

アジア研究センター共同研究「アジアにおける水の総合的研究」研究会報告

「タイにおける水と人とのかかわり—その多様性をめぐって」

高城 玲

昨年度創設された神奈川大学アジア研究センターの中心的共同研究として「アジアにおける水の総合的研究」（代表：後藤晃教授）が設定された。学部横断の共同研究としてそれぞれの専門分野間の対話がしやすいテーマとして「水」が取り上げられたものと思う。

今回はその初回の報告として、報告者のフィールドとするタイと共同研究のテーマである水がクロスするところの概要を確認する作業に報告の重点を置いた。具体的には、タイにおける水と人とのかかわりを広範に概観し、そのかかわり方の多様性（多義性）を考えることで、今後の焦点化に向けた基礎とすることを目的とした。

タイにおける水と人とのかかわりは多方面にまたがっており、その全てを概観することはできないが、今回の報告では中でも、1. 言葉の中の水と人、2. 生活の中の水と人、3. 信仰の中の水と人、4. 歴史の中の水と人、5. 資源としての水と人、6. 公害・災害としての水と人という6つの側面から検討した。

まず最初に、タイにおける水は言葉の中でも関連用語が多岐にわたり語彙も非常に多いことを確認した。また、生活の中でも、雨水や河川の水によって稲作を中心とする農耕が古くから続けられており、かつては運河や河川が主たる交通手段で、住居や市場も運河や河川沿いに造られるなど、まさに水を中心に日常生活が営まれていたことも確認した。宗教的な儀礼においても、聖なる水が祝福をもたらす対象を浄化するものとして頻繁に用いられることなども歴史的な背景を含めて確認し、水と人との歴史文化的な背景を示した。

次に焦点を当てたのは、特に灌漑農業を中心とする資源としての水と人とのかかわりである。ここでは、これまでの先行研究で、灌漑による水資源の管理と当該地域の水利社会秩序の形成、ひいては王権や国家権力との関係が焦点化されて来たことをまずは確認した。その上で本報告では、現代の水資源管理における国家側の働きかけの事例として、ナコンサワン県農村の灌漑ポンプ管理

委員会における国家主導の研修の一場面を取り上げた。そこでは、研修の場を通じて、水資源管理が国家による統治の手段・資源とされていくこと、また同時に地域社会の秩序が作りだされていくことを示した。

最後の公害・災害としての水と人においては、カンチャナブリ県の鉛鉱山による水汚染公害、2004年のインド洋津波によるタイ南部の災害、2011年の北部・中部を中心とする洪水災害の3つを概観した。鉛物質による水汚染公害は、山間部カレン族の村落を十数年にわたって苦しめて来たが、住民らは社会運動を繰り広げながら、村で唯一で村の心でもある川の水と共に生きざるを得ない状況にあることを報告した。

津波という水の災害に関しては、自然災害の津波が宗教的な罰として読み替えられていく事例など、その後の復興過程も含めて村や人に与える影響は甚大であるだけでなく、社会、経済、政治、宗教と多面的で多様であることを示した。

またタイにおける洪水とは、2011年のように大規模な被害をもたらす一方で、かつてのデルタ地帯では氾濫原農業における恵みをもたらす存在でもあったことをまずは示した。そうした洪水そのものが両義的な意味合いを持ち得るだけでなく、災害としての洪水に限定して考えてみても、人や社会とのかかわりは多様であり、土壌による臨時堤防など、洪水への治水対策が時に堤防の内側（守られる側）と外側（犠牲になる側）を可視化することで地域住民の憎しみの対象となる場合もあることなども紹介した。

上記のように本報告では、タイにおける水と人とのかかわりが様々な側面において多様であり多義的であることを改めて確認することができた。今回の報告は、今後の研究における対象の焦点化のための準備作業として位置づけられる。この一見つかみどころのないタイにおける水や水と人とのかかわりを具体的にどのように焦点化していくかは今後に残された課題であると言えるだろう。

（所員 経営学部准教授）



タイ中部農村における農業用の灌漑水路



ソンクラーン（タイの正月）における水掛儀礼